

# 20世紀前半におけるイタリア自然風景の 観光絵葉書にみる文学詩引用の流行について

— ダンテ、カルドゥッチ、ダヌンツィオの事例を中心に —

河村 英和

## La moda delle citazioni letterarie nelle cartoline turistiche dei paesaggi naturali italiani durante la prima metà del Novecento

— Esempi dei versi di Dante, Carducci, e D'Annunzio —

Ewa KAWAMURA

**要旨**：20世紀初頭から第二次大戦まで、イタリアの絵葉書はメディア的責務を負っていた。とくに大詩人ダンテとダヌンツィオについては彼らの存在そのものが愛国心を鼓舞する宣伝装置として、絵葉書に利用されることが少なくない。種類も多いうえデザイン性も高く、なかには明らかに政治的に利用された過激なものまであった。第一次大戦期は、オーストリアの国境付近の山岳地帯や「未回収の」土地の風景を写した絵葉書に、カルドゥッチらの愛国的な詩を添えたシリーズも登場した。ファシズム期は、美しいイタリアの風景写真絵葉書に、有名無名の詩人たちの詩の引用を添えたものが流行し、あえて場所を特定しない「アノニマスな」風景にすることによってロマンチックな詩情を演出させる場合もあれば、詩人ゆかりの「特定の」地を売りにするものもあり、後者は観光絵葉書としても機能した。本論では、とくに著名な詩人ダンテ、カルドゥッチ、ダヌンツィオをテーマにした1910-50年代に発行された絵葉書を中心に、愛国プロパガンダ性やナショナル・ロマンティシズムの側面、時代とともに変化するその題材の傾向などを検証する。

**キーワード**：観光絵葉書、引用詩、イタリア風景、ダンテ、カルドゥッチ、ダヌンツィオ

### 1. はじめに

かつて絵葉書は、挨拶状や広告媒体としてや観光地を題材にした観光用絵葉書などを主流にしつつも、ときには印刷芸術でもあり、19世紀末から20世紀半ばにかけて興隆した一種のメディアでもあった。つまり観光の思い出としての風景や都市、各地の名所や建物を写したテーマ以外では、新年・クリスマス・復活祭など季節の行事別の挨拶や誕生日を祝うグリーティングカード、美女や役者など著名人のプロマイド写真、演劇や文学の名場面を描いた実写連作もの、時事風刺の効いたカリカチュアのイラスト葉書がある一方で、自然災害や戦争被害を伝えるニュース性のある時事的なものまであり、二つの大戦時には戦勝へ向けての愛国心を鼓舞させるプロパガンダ目的のものが増加し、黄金期となった当時の絵葉書の種類はじつに多種多様であった。

印刷手法も時代ごとに傾向と流行があり、19世紀末からは20世紀初頭はイラストにもとづいた多色石板印刷(クロモリトグラフ)が好まれ、その興隆はドイツが早かった。20世紀初頭から1920年代までは、写真を精緻に製版できるコロタイプ印刷の絵葉書が普及し、銀塩写真の絵葉書もあるが<sup>(1)</sup>、観光絵葉書ではとくにこのコロタイプ印刷のものが圧倒的に多く、白黒(セピア)のときもあれば手彩色によってカラー化させることもある。1910年代以降は、油彩や水彩のイラストをオフセットでカラー印刷した絵葉書も増えてゆく。1920年代は版画で彩色したコロタイプ印刷の観光絵葉書も流通したが、カラーのオフセット印刷も散見される。しかし、第二次大戦中は不況下の経費削減のため、コロタイプもオフセットも単色印刷が主流となった。

絵葉書の判型は、19世紀末から戦前まではほぼ統一されていた。かつては小さく細長めの判型(14cm×9cm)であったが、それが1940年代に刷新されて縦横比も変わり、やや判型が大きくなる(約14.8cm×10.4cm)。戦後の経済成長によってマスツーリズムの時代が到来すると、メディアとしてのニュース性を伴った絵葉書の役割はほぼ終えていて、ますます観光用の絵葉書が優勢になった。1950年代は白黒の(ときにはその上から手彩色をしていたが)写真製版のものが主流だったが、1960年代より現在のようなカラー写真をオフセット印刷にした絵葉書が普及していった。

以上、多種多様な絵葉書から本論では、20世紀前半にイタリアで普及していた風景写真絵葉書で、著名な詩人たちの作品からの詩の引用が添えられているものに焦点を当て、なぜそれらが生産されていったのか、時代ごとに移りゆく目的、題材となる風景・場所、引用に好まれていた詩人の傾向などから、二つの大戦間の時代を中心に、当時のイタリアの文化的精神に垣間見られた、愛国的ナショナリズムの一端を読み解く試みとしたい<sup>(2)</sup>。

## 2. 1910～40年代に発行された詩の引用付き単色風景絵葉書

1910～40年代に興隆した詩の引用付き風景写真絵葉書の多くは、単色コロタイプ印刷であるが、とくに1920～30年代は黒インクよりも色付きインクが好まれていた。ダークグリーン、濃紺、茶、ボルドー、紫など、印刷がぼやけないような濃い目の色である。詩的な叙情を表現するには、そのような黒色以外の渋めの色のカラーインクで印刷したほうが効果的だったためだろう。題材となった風景は大きく分けて二つに分類できる。ひとつは、場所をあえて特定させていない「アノニマス」な自然風景で、湖や海辺、山間、牧歌的な草原など、静寂や安らぎを表現する詩と合わせやすいものである。もうひとつはキャプションで題材の場所が明示されているものである。例えば詩人が実際に訪れた地を謳っている場合、該当する詩からの引用を組み合わせ、その場所を題材とする写真絵葉書が文学絵葉書という立場だけでなく、観光絵葉書としての役割も兼ねていたのだ。詩人が住んだ家は、すでにそれ自体が観光資源として絵葉書の題材になることが多いが、詩人本人が自分の住家にまつわる詩を残していない場合は、詩の引用は添えようがなかった。また有名な観光地の絵葉書に詩の引用を付す場合、とりわけナポリの絵葉書では地元詩人の作品からの引用が添えられることが圧倒的に多いが、ときにはナポリ出身者ではない詩人の詩の引用から採用される場合もあった(Kawamura, 2021, 編集のためページ数未定)。いずれにせよ題材となった風景が、「アノニマス」であるにしても「特定された」ものであるにしても、そこに付された詩の作者たちは中世から20世紀初頭の詩人までと幅広く、誰もが知るビッグネーム級の詩人から、イニシャルだけで表現された特定不能な無名詩人までと多岐にわたっていた。

### (1) アノニマスな風景写真絵葉書

詩の引用が付されたアノニマスな風景の写真絵葉書の黄金期は、イタリアの場合1910～30年代であるが、英国を除く他のヨーロッパ諸国では類似した現象がさほど興隆しなかった。つまり英国の場合については、イタリアよりもっと早い時代に興隆・普及していた<sup>(3)</sup>。1900～10年代、ロンドンに拠点を置く絵葉書専門の印刷会社Raphael Tuck & Sons(以下タック社)によって、著名な文人たちの詩の引用を載せた6枚セットのシリーズ絵葉書が、様々なテーマと印刷手法で数多く発行されていたのだ。遅ればせながらイタリアで流行したのは、主に自然風景の写真と詩が組み合わせられたものであるが、このイギリス製の風景絵葉書は写真だけではなくイラストのものも多い。描かれた風景はキャプションで特定されている場所よりも、圧倒的にアノニマスな風景が好まれた。それらは牧歌的な英国の「田舎の風景」のシリーズはもとより、「海の波」を撮影したシリーズも非常に多く<sup>(4)</sup>、付される詩の作者は、古くはルネサンス時代のロバート・ハリック、ミルトン(Fig. 1)、ジェイムズ・トムソン、ロバート・バーンズ、バイロン<sup>(5)</sup>、サミュエル・ロジャース、マシュー・アーノルドといった面々である。さらにイタリアの場合と決定的に違うのは、美人画をテーマにした詩の引用付き絵葉書シリーズも多く、これらはシェイクスピア<sup>(6)</sup>、ウィリアム・モリス、画家ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの妹のクリスティーナ・ロセッティ、H.W. ロングフェローらの詩が組み合わせられる傾向にあった<sup>(7)</sup>。

英国詩人の引用を添えるアノニマスな風景の絵葉書の題材は、大きく分けて二つある。先にも述べたように、ひとつは、しばしば羊の群れがいるような牧歌的な田舎の自然風景、もうひとつは悪天候下の荒れた海の波だ。前者は「ピク



Fig. 1：荒れ狂う波をテーマにした英タック社の6枚セット絵葉書「FOAMING BILLOWS, SERIES II」(1907年)からの一枚：ミルトンの『復樂園 *Paradise Regained*』(第4巻、1671年)からの引用「堅牢な岩に歯向かってゆく高波 *Surging waves against a solid rock*」が添えられたアノニマスな風景の絵葉書

チャレスク」、後者は自然への畏怖にある種の快感を見出す「崇高」の美意識に基づいたものであり、いずれも18世紀後半から19世紀初めに英国を中心に浸透したこの美学の概念が、20世紀初頭にリバイバルしたかのようだった。哲学者カントが『美と崇高の感情に関する観察』のなかで、この感情への温度差が国民性によって異なることを指摘しているように (Kant, 2000, 368-369)、崇高に対する感性が、他国と比較してあまり普及しなかったイタリアでは、荒波をテーマにした絵葉書というのは、イギリス、フランス、ドイツに比べて極端に少なかった (Kawamura, 2016, 466)<sup>(8)</sup>。

ようやくイタリアで、アノニマスな自然風景写真の雰囲気合った詩の引用を添えた絵葉書が流行したのは、1910年代半ば以降から1940年代前半、すなわち第一次大戦期とファシズム期だった。引用されたのは、ウェルギリウスのような古代詩人からアーダ・ネグリのような当時存命中の現代作家までと幅広いが、種類の多さが際立つのは19世紀の詩人たちの作品から引用された風景写真絵葉書である。発行した印刷所が記名されていない絵葉書がほとんどで、記載される場合はミラノの *Ufficio Revisione Stamapa*、ミラノの *Cecami* 社、テルニの *Ufficio Revisione Stamapa*、ポルデノーネの *Ed. R.S. Pordenone*、所在地不明の *Edizioni A. Palmieri* (写真は *T. Bernarchia* による) と *IPACT* 社といった版元で、いずれも北イタリアに偏っているようだ。英タック社のような6枚セットのものはほとんどなく、もっと枚数を多く収めたセットでシリーズ化しているものもあるが、イタリア製の風景絵葉書は単品販売が主流であった。

アノニマスな風景写真と詩がよく組み合わせられた作者は、国民的大詩人のダンテ、レオパルディ、デ・アミーチス、カルドゥッチ、ダヌンツィオ、アーダ・ネグリ (Fig. 2) のような極めて知名度の高い詩人たちのほか<sup>(9)</sup>、パリーニ *Giuseppe Parini* (1729-1799)、プリーナ *Benedetto Prina* (1831-1891)、フォガッツァーロ *Antonio Fogazzaro* (1842-1911)、ラピサルディ *Mario Rapisardi* (1844-1912)、ステッケッティ *Lorenzo Stecchetti* (1845-1916) など、当時はある程度有名であっても、今ではすっかり知名度が下がってしまった詩人たちもよく登場した。

ヴェローナ生まれの19世紀の詩人アレアルド・アレアルディ *Aleardo Aleardi* (1812-1878) の引用が付されたアノニマスな風景写真絵葉書 (1920～30年頃) の数はかなり多い。なかでも、静かな湖に帆の付いた小型ボートが浮かんでいる構図のものが多く、彼がヴェローナで活躍したこととその風景の様相から推定するに、それがヴェローナからアクセスしやすいガルダ湖 *Lago di Garda* で撮影されたことが伺える。なおガルダ湖の南部は、イタリアの国家統一に関わりのある1859年のサン・マルティーノ *San Martino* とソルフェリーノ *Solferino* の戦場に近いため、無意識のうちにも愛国的なイメージと重ねやすいエリアといえる。ガルダ湖を写した絵葉書に引用されたアレアルディの詩句は、「*E di musica piene eran le brezze / Che gonfiavan la vela ai pescadori* そよ風は音楽そのもの / それは漁師船の帆を膨らませた」(Aleardi, 1864, 80) で、その描写と風景はたしかに調和しているが (Fig. 3)、その出典は「チルチェッロ山 *Il Monte Circello*」というラツィオ州にある山の名を冠した作品であり、被写体と引用された詩の舞台は全く一致





Fig.2 : アーダ・ネグリの詩「雪 *Nevicata*」からの引用：「Tutto intorno è pace / Chiuso in oblio profondo / Indifferente il mondo / tace」(Negri, 1911, 32) を付した、牧歌的なアノニマスな風景の絵葉書 (1920-30年頃)

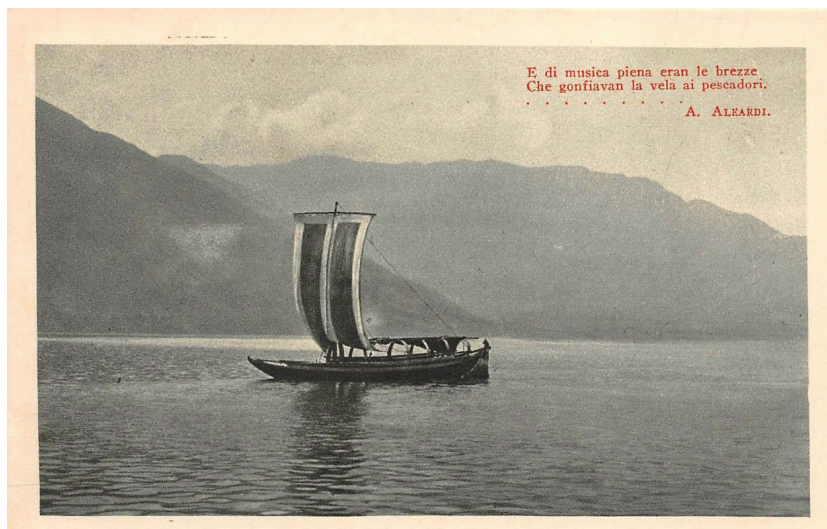


Fig. 3 : アレアルディの詩「チルチェッロ山 *Il Monte Circello*」からの引用：「E di musica piene eran le brezze / Che gonfiavan la vela ai pescadori」(Aleardi, 1864, 80) が付いたアノニマスな風景の絵葉書 (1920年頃)

していないものの、引用箇所だけ読めば情景描写的には辻褄が合うという具合だ。さらに同詩「チルチェッロ山」からは、港町ナポリの目抜き通り「ローマ通り *via Roma*」の写真とそのキャプションの入った観光絵葉書のために、「La più bella città delle Marine 最も美しい港町」(Aleardi, 1864, 85) という箇所の引用が選ばれていて、ここでも出典詩の舞台と風景写真の地理は一致していないが、そこだけ読む分には違和感がない。アレアルディの場合は、リソルジメントの愛国心が滲みでた作品が多いため、祖国の情景の美を称えるのに都合が良い詩人であったのだろう。つまり「チルチェッロ山」に登場する描写は、舞台となった本来の地名に縛られることなく、イタリア各地の風景美の普遍性を表現するものとして、様々な風景絵葉書に付すことに躊躇なかったと考えられる。

## (2) 特定されている場所の風景写真

当代一流の女性詩人アーダ・ネグリ Ada Negri (1870-1945) は、アノニマスな風景の絵葉書の引用詩で最も重宝された一人であるが、ときには場所が特定された(キャプションで風景写真の場所が明示される)絵葉書にも彼女の詩が付されることは少なくない。例えばトスカーナの中世の村スカルペリーア *Scarperia* の全景写真の観光絵葉書 (1910年頃) には、彼女の詩作品「雪 *Nevicata*」<sup>(10)</sup> や「白い家 *Casette bianche*」<sup>(11)</sup> からの引用が載せられた。平穏と静寂を

謳った作品である「雪」からの引用は、穏やかな自然風景に合わせやすいために汎用性が高く、トスカーナの山岳地帯サン・ペッレグリーノ San Pellegrinoの絵葉書(1910年頃)でも登場する<sup>(12)</sup>。また、オルタ湖Lago d'Orta畔の丘の上の教会マドンナ・デル・サッソMadonna del Sassoで草を食んでいる羊たちの写真絵葉書(1920-30年頃)には「ほほ笑み *Sorrisi*」という詩から、斜面にいる羊の群れが言及される箇所への引用が付され<sup>(13)</sup>、リグーリアの海浜町ライグエーリアLaiguegliaの海水浴場の絵葉書(1920年頃)には「あの海の声 *La voce del mare*」という詩からの引用が添えられた<sup>(14)</sup>。

有名詩人たちの生家や住んだ家は恰好の観光絵葉書の題材となっていたが、そこに当該詩人の作品からの引用が掲載されるものは、意外にも極めて少ない。ダンテのフィレンツェの生家、ソレントのタッソの生家、レカナティのレオパルディの生家、ダヌンツィオのベスカーラの生家、ダヌンツィオが長年住んだセッティニャーノのラ・カッポンチーナ荘やガルドーネ・リヴィエラの大邸宅「ヴィットリアーレ」、アグリジェントのピランデッロの生家など、これらを題材にした観光絵葉書は、詩人本人の書いた詩の引用と組み合わせられることがほとんどないのだ。例外はペトルルカ、カルドゥッチ、パスコリの場合である。

まず初期ルネッサンス時代の詩人ペトルルカ Francesco Petrarca (1304-1374) の場合であるが、彼のアレツォ Arezzoの生家ではなく、晩年を過ごしたアルクワ Arquàの住家のほうに詩の引用が付いた絵葉書が、20世紀初頭から戦後までしばしば発行された。しかしペトルルカの作品から引用したわけではなく、新古典主義時代の詩人ヴィットリオ・アルフィエーリ Vittorio Alfieri (1749-1803) の詩 (Fig.4) か<sup>(15)</sup>、ウーゴ・フォスコロ Ugo Foscolo (1778-1827) が『ヤコポ・オルティスの最後の手紙 *Ultime lettere di Jacopo Ortis*』(1802年)のなかでペトルルカの家について記述した箇所が掲載されたのだ<sup>(16)</sup>。

一方、国民的作家カルドゥッチが住んだ家を描いた絵葉書で、彼の詩の引用が付いているものは、ヴァルディカステッロ Valdicastelloにある生家やボローニャの晩年の家ではなく、幼年期に過ごしたトスカーナの村カスタンニエート(1907年にCastagneto Carducciと改名)の家か (Fig. 5)、1899年にリグーリア海岸の町アレンツァーノ Arenzanoで世話になった貴族の別荘 Villa del conte Eugenio Figoli des Geneysを題材にしたものである<sup>(17)</sup>。なおカルドゥッチが謳った土地も数多く絵葉書化されているが、これらはカルドゥッチについて後述する節で取り上げる。

愛国詩人パスコリ Giovanni Pascoli (1855-1912) については、本人が自分の家についての詩作を残しているため、サン・マウロ(1932年にSan Mauro Pascoliと改名)にある生家の絵葉書(1950年代)には<sup>(18)</sup>、当然ながら詩集『カステルヴェッキオの歌 *Canti di Castelvecchio*』(1903年)に収録されている詩「わたしの家 *Casa mia*」からの引用が付けられた<sup>(19)</sup>。1895年から住んでいたトスカーナのバルガBargaにある村カステルヴェッキオ Castelvecchioの家は<sup>(20)</sup>、やはりパスコリ自身が『カステルヴェッキオの歌』のなかで謳っているのも、ここからの引用と彼ゆかりの地の風景写



Fig. 4 : アルフィエーリのソネットからの引用 : «O cameretta, che già in te chiudesti...» (Alfieri, 1810, 162) が掲載されているアルクワのペトルルカの家の観光絵葉書(20世紀初頭、パドヴァのEdiz. P. Minotti刊)





Fig. 5: カルドウッチの詩「マレンマ・ピサーナを横切って *Traversando la maremma pisana*」からの引用: «...ma di lontano / pace dicono al cor le tue colline / con le nebbie sfumanti e il verde piano / ridente nelle piogge mattutine» (Carducci 1894: 205) が載ったカスタンニエート・カルドウッチの風景絵葉書 (1920年頃)

真を組み合わせた観光絵葉書が数多く発行されていた。カステルヴェッキオのサン・ニコロ教会の絵葉書 (1920～30年代) には、詩「わたしの家」から、その鐘楼について謳っている箇所が添えられた<sup>(21)</sup>。教会の背後にパニア山 *Monte Pania* がみえる風景写真の絵葉書 (1910～20年代) には詩「カプローナの鐘の音 *La squilletta di Caprona*」からの引用<sup>(22)</sup>、バルガの村の遠景風景の絵葉書 (1920年代) には、バルガについての言及のある詩「戦場のサン・ピエトロの兵士 *Il soldato di San Piero in campo*」からか<sup>(23)</sup>、「筋が通ったバルガの人 *L'uomo giusto di Barga*」からの引用が選ばれた<sup>(24)</sup>。「バルガの溝 *Il fosso*」というキャプションが付いた絵葉書 (1920～30年頃) では、写真の中央奥に小さくバルガ出身の政治家モルディーニ *Antonio Mordini* (1819-1902) の立像 (1905年建立) が見えるが、載せられたのは「祖国のアントニオ・モルディーニ *Antonio Mordini in patria*」という詩から、「青年イタリア *Giovane Italia*」を結成した政治家マッツィーニ *Giuseppe Mazzini* (1805-1872) に言及した箇所である<sup>(25)</sup>。つまり愛国詩人パスコリの詩が付いた絵葉書の流行は、当時のナショナリズム精神を高揚させるためのメディア戦略でもあったのではないだろうか。じっさい、1176年のレニャーノの戦い *Battaglia di Legnano* の七百周年を記念する1876年、この戦いに挑んだ12世紀の伝説の兵士アルベルト・ダ・ジュッサーノ *Alberto da Giussano* の記念碑がレニャーノに設置 (1900年に新設) されたが、この記念碑を写した20世紀初頭の絵葉書には、この兵士アルベルトを謳ったパスコリの愛国詩「神輿の歌 *Canzone del Carroccio*」からの引用が掲載されているのである<sup>(26)</sup>。

パスコリの亡骸は、カステルヴェッキオの家に隣接した礼拝堂にある。蔦が絡まっているこの礼拝堂のファサード写真の絵葉書 (1920年頃) には、詩「*Il sepolcro* あの墓」から «Lasciate quell'edera! Ha i capi fioriti. Fiorisce, fedele, d'ottobre, e vi vengono l'api per l'ultimo miele その蔦はそのままに! 花の蕾があるのです。10月には忠実に花開き、そこへ最後の蜂蜜づくりのために蜂たちがやって来るのです» という箇所が載せられた (Pascoli, 1906, 19)<sup>(27)</sup>。

さらにパスコリ作品の版元であるザニケッリ *Zanichelli* 社も1930年代には書籍の宣伝を兼ねて、パスコリゆかりの地をテーマにして詩の引用を付けた絵葉書シリーズを発行していた。例えばそのシリーズ中の一枚である、カステルヴェッキオの庭の写真絵葉書には、パスコリが1907年に書いた詩「菜園にて *Nell'orto*」(『秋の日記 *Diario autunnale*』に収録) からの引用が添えられていた (Fig. 6)<sup>(28)</sup>。

### 3. ダンテの言葉が引用される風景絵葉書

詩聖ダンテ *Dante Alighieri* (1265-1321) をモチーフにした絵葉書は、心の恋人ベアトリーチェ *Beatrice Portinari*

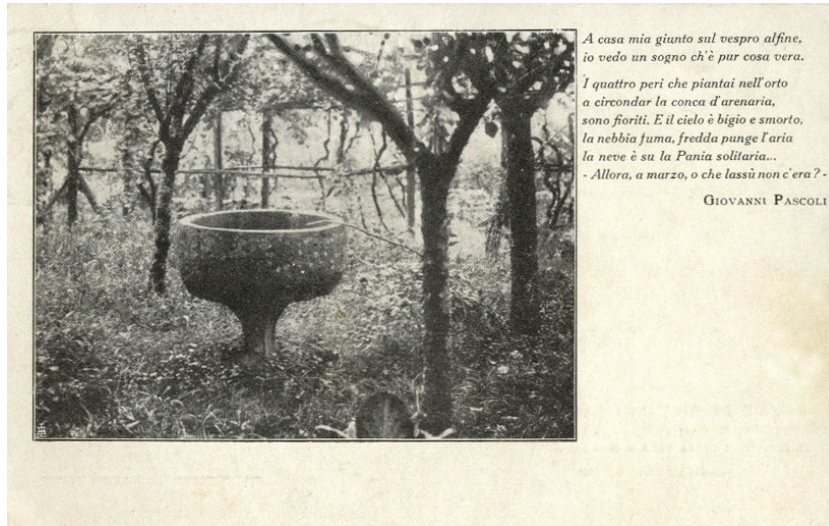


Fig. 6: パスコリの版元ニコラ・ザネケリ社が発行した、パスコリの詩「菜園にて *Nell'orto*」からの引用が掲載されたカステルヴェッキオの風景絵葉書 (1930年頃)



Fig. 7: ダンテの『神曲』(煉獄篇第3歌79-84)の引用付きの羊のいる自然風景絵葉書 (1910年代)

(1266 ca.-1290) と出会うシーンを題材にしたものや、美しい多色リトグラフで印刷された『神曲 *Divina Commedia*』の主要場面を描いたシリーズ (S. Sborgi社発行) など様々な種類があるが、これらは彼の生涯そのものを物語として捉えた場合も含めて文学挿絵ジャンルに相当する<sup>(29)</sup>。ファシズム期にはダンテの肖像そのものを題材にした絵葉書が興隆し、ダンテは愛国のシンボルと扱われていたため、ダンテの肖像にムッソリーニの言葉からの引用も添えられたプロパガンダ絵葉書も発行されたが(河村, 2015, 25-26)、本稿ではダンテにまつわる風景写真とダンテの作品の引用を組み合わせる絵葉書に焦点を当てる。

1910～30年代に流行したアノニマスな風景写真のあるダンテの絵葉書では、『神曲』の煉獄編からの引用がよく載せられた<sup>(30)</sup>。例えば羊の群れの写真絵葉書には、「Come le pecorelle escon dal chiuso, / Ad una, a due, a tre e l'altre stanno / Timidette, atterrandò l'occhio es / ... / he fa la prima l'altre fanno / ... / andosi a lei s'ella si arresta / ... / e quete e lo imperché non sanno / ...」(煉獄篇第3歌79-84) という箇所が付され (Fig. 7)、湖もしくは海のさざ波を写したアノニマス風景の絵葉書には、「il tremolar della marina 海の震えが」(煉獄篇第1歌117) という言葉が添えられ、引用が短ければ短いほどダンテの深淵さがより感じられるのではないだろうか。新緑の季節を思わせる自然風景の絵葉書には、「L'aura di maggio movesi ed olezza, tutta impregnata dall'erba e da' fiori 五月らしい芳香が、すべての草花に染み込んで」(煉獄篇第24歌146-147) が載せられ、船が湖



に浮かんでいる風景の絵葉書には、「Era già l'ora che volge il disio ai naviganti e 'ntenerisce il core...」すでに船乗りたちの想い馳せし時、心を和らか…」（煉獄篇第8歌1-6）で始まる箇所が添えられた。つまりダンテの『神曲』からの引用の存在によって風景は、愛国の化身ダンテで神格化され、イタリアの風景の美しさがより際立ち、意識せずとも国民に愛国心を植え付ける効果があったと思われる。

場所が特定されている絵葉書、すなわち観光絵葉書としての役割も担ったものでは、ダンテが亡命中に訪れたフォルリ Forlì や、『神曲』中で言及される町チェゼーナ Cesena や、ダンテの名を冠した山小屋があるファルテローナ山 Mont Falterona などがよくその題材に選ばれた。まずフォルリの町の中心の広場 Piazza Aureio Saffi を写した絵葉書（1920～30年代）には、「La terra che fè già la lunga prova e di Franceschi sanguinoso mucchio 長年の抵抗の地、フランス人の血が滲む盛山」（地獄篇第27歌43-44）という1282年の対フランスのフォルリの戦い Battaglia di Forlì について書かれた詩が添えられた。チェゼーナ全景の絵葉書（1910年代）には<sup>(31)</sup>、「E quella cu' il Savio bagna il fianco, così com'ella sie' tra 'l piano e 'l monte, tra tirannia si vive e stato franco サーヴィオ川がかくも平地と山地の間を流れるように、専制政治と民主国家の間に生き」（地獄篇第27歌52-54）という当地の地勢描写が充てられたし、トスカーナのプラトヴェッキオ Pratovecchio にあるロメーナ城 Castello di Romena の絵葉書（1910年代）には、この城で贖金づくりをしていたアダモ親方 Maestro Adamo に言及した箇所の引用：「Ivi è Romena, là dov'io falsai la lega suggellata del Batista; per ch'io il corpo sù arso lasciai ここがロメーナ、ここで私がフローリン金貨を偽造したゆえ、自分の体が大炎上」（地獄篇第30歌73-75）が添えられた。ダンテが亡命中に一時期身を寄せたフォスディノーヴォ Fosdinovo があるマラスピーナ城 Castello Malaspina の絵葉書（1920～60年代）は、ダンテをもてなした城主コッラディーノ・マラスピーナ Corradino Malaspina が登場する箇所の引用：「Fui chiamato Currado Malaspina (...) vostra gente onrata non si sfregia del pregio de la borsa e de la spada 我はコッラード・マラスピーナと呼ばれし者 (...) 誉れ高し一族は、剣にも財にも汚名なし」（煉獄篇第8歌118-129）が載せられるだけでなく（Fig. 8）、ときにはダンテのマラスピーナ城滞在について言及したダヌツィオの詩や<sup>(32)</sup>、カルドウッチの詩「愛の歌 *Il Canto dell'Amore*」からの引用が付いた絵葉書（1920～70年代）も発行されていた<sup>(33)</sup>。

なおカルドウッチはダンテが亡命中に滞在した様々な場所について謳った詩を残していて、チェゼーナ近郊ベルティノーロ Bertinoro があるポレンタの教会 Chiesa di Polenta の絵葉書（1920年代）には、カルドウッチの詩「ポレンタ教会 *La Chiesa di Polenta*」からの引用が付けられた<sup>(34)</sup>。ポレンタは、ダンテの『神曲』（地獄篇第5歌）に登場する、姦通罪で地獄に墮ちた実在のヒロイン、フランチェスカ・ダ・リミニ Francesca da Rimini (1259ca.-1285) のゆかりの地で「フランチェスカの糸杉 *Cipresso di Francesca*」と呼ばれる糸杉があったが、1897年に雷で倒れ、その翌年にカルドウッチが植樹している<sup>(35)</sup>。よって、この糸杉を題材にした絵葉書（1910～10年代）には、当然ながらカルドウッチの同詩からの引用：「Agile e solo vien di colle in colle / quasi accennando l'arduo cipresso. / Forse Francesca



Fig. 8: ダンテの『神曲』（煉獄篇第8歌118-129）からの引用が付いたマラスピーナ城の絵葉書（1910年代）





Fig. 9: ダンテの『神曲』から着想されたカルドゥッチの詩「ポレンタ教会」の引用が付いたポレンタにある「フランチェスカの糸杉」の絵葉書 (1910年代)

temprò qui li ardenti / occhi al sorriso? くだらかな丘から丘へと続くもの、/ やっぱり悲しみの糸杉に目が向いてしまう。おそらくここでフランチェスカは情熱に燃えた瞳で、/ ほほ笑んだのではなかろうか?」(Carducci, 1902, 103) が添えられた (Fig. 9)。

ダンテの絵葉書は、以上のような文学的関心からつくられた教養的なものだけではない。先にも述べたように、ダンテは19世紀以降イタリア文化の象徴の頂点のような扱いとなっていて、愛国心やナショナリズムを高揚させる目的でダンテをモチーフにしたプロパガンダ絵葉書も数多い。国家統一後、ダンテの立像がイタリア各地に建立されるが、まずダンテ生誕六百周年にあたる1865年にはフィレンツェとヴェローナ（前者は生誕地、後者は訪問地）にでき、没後五五〇周年の1871年にはナポリとマントヴァに設置された。ゆえにそれらは容易に観光絵葉書の題材となった。じっさいファシズム期に発行されたナポリのダンテ像の絵葉書にはプロパガンダ色を露わにしたものもあり、そこにはダヌンツィオの詩「ダンテに捧ぐ *A Dante*」からとった仰々しい引用: «custode alto dei fati, o Dante noi ti attendiamo! 運命の守護神、あなたダンテを我々は待っているのです!」(D'Annunzio, 1918, 9) が添えられていた。

ダンテの立像の中で政治戦略的に最も過激なものは、1896年に「未回収のイタリア」の地トレント Trento に設置されたものだ。その建立の目的がこの町がオーストリアではなくイタリア文化圏であることを主張するためであったため、トレントのダンテ像をモチーフにしたプロパガンダ絵葉書は20世紀初頭から数多く出回った。例えばこの種の絵葉書には、除幕式用にカルドゥッチが書いた詩「トレントのダンテ記念碑のために *Per il Monumento di Dante a Trento*」からの引用はもちろん<sup>(36)</sup>、他のカルドゥッチの書いた愛国詩からの引用や<sup>(37)</sup>、ダヌンツィオの愛国詩「ナルキッソスとピラデ・ブロンゼッティの思い出に寄せて *Alla memoria di Narciso e di Pilade Bronzetti*」からの引用が付けられることもあった<sup>(38)</sup>。なおトレントのダンテ像の台座部分のブロンズレリーフは『神曲』をモチーフにしたものであるので、このレリーフをクローズアップした写真に相応しい『神曲』からの引用を添えた絵葉書も1915年頃に発行されていた。

以上、数あるダンテにまつわる絵葉書のうち、トレントの立像を題材にしたものは政治的に愛国プロパガンダ色が強くなる傾向にあったが、『神曲』の引用のある自然風景の絵葉書については、基本的にはダンテの文学的価値を重視した教養的文学絵葉書である。しかし、やはりダンテという不朽の存在によって演出される高尚さは愛国心を揺さぶる緊張感に繋がっており、当時の国民国家としての時代的精神が反映されているのだろう。

#### 4. カルドゥッチの言葉が引用される風景絵葉書

ノーベル文学賞作家カルドゥッチ Giosuè Carducci (1835-1907) もまぎれもなく愛国詩人に属するため、カルドゥッチにまつわる土地の風景絵葉書に、カルドゥッチの詩からの引用を添えれば、図らずともその風景に対する愛着や敬

意が増し、愛国心を鼓舞させる効果があったに違いない。

カルドゥッチ関連の絵葉書では、まず彼の書いた詩「クリトゥンノの水源で *Alle fonti del Clitumno*」(1876年)からの引用が添えられたシリーズが1920～30年代に量産された。ウンブリアのクリトゥンノ川 *Clitunno* は、古代の詩人ヴェルギリウスも謳った名高い川で、その畔にある古代神殿 *Tempietto del Clitunno* は2011年にはユネスコ世界遺産に登録されている。カルドゥッチの「クリトゥンノの水源で」の引用付き絵葉書には、ときには風景写真なしで、三色のイタリア国旗と月桂樹で詩を縁取ったデザインが施された愛国プロパガンダ色丸出しのものが、第一次大戦中にミラノの *Raimondi* 社より発行されていた。また、クリトゥンノ川に近い町スポレート *Spoletto* の観光絵葉書にも「クリトゥンノの水源で」からの引用 (*Carducci, 1877, 59-69*) が付けられることがあった<sup>(39)</sup>。

カルドゥッチは「ピエモンテ *Piemonte*」(1898年)と題する詩も書いており、その中でピエモンテの町イヴレーア *Ivrea*、ビエツラ *Biella*、クーネオ *Cuneo*、モンドヴィ *Mondovi* が言及されているが、よく風景写真絵葉書になったのはイヴレーアとビエツラで、該当箇所引用が添えられた<sup>(40)</sup>。発行されていた期間も第一大戦中から1960年代までと長く、種類も多い。例えばビエツラの絵葉書には詩「ピエモンテ」から、「*Biella tra 'l monte e il verdeggiar de' piani lieta guardante l'ubere convalle, ch'armi ed aratri e a l'opera fumanti camini ostenta* 山と心地よい平原の間に緑色づくビエツラ、そんなよく耕された肥沃な谷間を見ていると、煙たつ煙突がニョキッとみえる」(*Carducci, 1902, 16-17*) という引用が掲載されたが、町の全景写真はカルドゥッチの言葉通りに、工場の煙突を入れる場合もあれば (*Fig. 10*)、牧歌的な自然風景を強調するためにあえて煙突が見えない写真が採用されることもあった。

ヴァッレ・ダオスタの山岳リゾート地クールマユール *Courmayeur* もカルドゥッチが夏の避暑に訪れ謳った町であるため、少なくとも1910～20年代にその引用付きの風景絵葉書が生産されていた<sup>(41)</sup>。同じ頃、リグーリアの海浜町ライグエーリア *Laigueglia* の風景絵葉書にも、カルドゥッチの詩「過ぎ去る時 *Ruit Hora*」や<sup>(42)</sup>、「アッダ川に沿って *Su l'Adda*」から<sup>(43)</sup>、海や水流に言及された箇所の引用が添えられたが、どちらもライグエーリアを描写した詩ではない。つまり、詩の内容が絵葉書の題材となる場所と地理的整合性が取れていなくても、情景的にマッチしてさえいれば使用されるわけで、これは当時かにカルドゥッチが人気のある詩人であったかという証明でもあるだろう。他にもロンバルディアのイゼーオ湖 *Lago d'Iseo* の風景絵葉書に、カルドゥッチの詩「言うは易く行は難し *Levia Gravia*」から水に関する部分が掲載されたが<sup>(44)</sup>、これもイゼーオ湖と直接関係あるわけではない<sup>(45)</sup>。一方ガルダ湖の絵葉書には、ガルダ湖畔の町シルミオーネ *Sirmione* を題材にした詩「シルミオーネ *Sirmione*」をカルドゥッチが書いているので、ここからの引用が使われる<sup>(46)</sup>。なおガルダ湖は、バルド山 *Monte Baldo* を背にした戦地ソルフェリーノとサン・マルティーノが近いので、同詩から「*Baldo, paterno monte* バルド、父なる山」(*Carducci, 1893, 62*) という箇所を、第一次大戦中の愛国プロパガンダ絵葉書に載せたものも登場した。



Fig. 10: カルドゥッチの詩「ピエモンテ」からビエツラの町についての引用が付いたビエツラの絵葉書で、描写通り煙突風景写真が採用されている例 (1950年代、ビエツラの文具店 *G. Bonda* 発行)



カルドゥッチの詩は、第一次大戦中「未回収のイタリア」の山岳地帯を扱った愛国プロパガンダ色強い絵葉書シリーズにもよく使用された。この絵葉書シリーズに起用された詩人は、19世紀リソルジメントの愛国詩人がとても多いが、引用回数で群を抜いているのは二人の詩人、カルドゥッチとジョヴァンニ・ベルタッキ Giovanni Bertacchi (1869-1942) だ。スイス国境に近い町キアヴェンナ Chiavenna 出身のベルタッキは、『アルプスの歌 *Il Canzoniere delle Alpi*』(1896年)をはじめとする山岳を謳った作品を沢山残しているため、山岳風景の写真絵葉書にその引用を載せるのには大変好都合だった。一方カルドゥッチは1892年、避暑に訪れていたオーストリア国境近くのベッルーノ Belluno の山岳地帯を題材にした詩『カドーレ *Cadore*』を書いたため、このエリアの山岳絵葉書にその引用が頻繁に載せられた。例えば、第一次大戦中にベッルーノの P. Breveglieri 社が発行していた絵葉書シリーズ「美しきカドーレ *Il bel Cadore*」と、ポルデノーネ Pordenone の印刷所 S. R. 社による「ピクチャレスク・カドーレ *Cadore pittoresco*」という「ピクチャレスク(画趣豊か)」な風景絵葉書シリーズには<sup>(47)</sup>、もちろんカルドゥッチの詩「カドーレ」から複数の箇所 (Carducci, 1892, 1; 4; 6; 10-12) が引用されたが、ときには他のカルドゥッチによるもっと露骨な愛国詩の数々も使われた<sup>(48)</sup>。同じようにオーストリアとイタリア間で領地争いが行われてきた山岳地帯カルニアもイタリア領であることを主張すべく、様々なイタリア詩人たちの引用をつけた「ピクチャレスク・カルニア *Carnia pittoresca*」という風景絵葉書シリーズが、同時期にポルデノーネの印刷所などから発行され、これにもカルドゥッチの詩「カルニアで *In Carnia*」をはじめとする、カルドゥッチの複数の詩からの引用 (Carducci, 1877, 45; 1889, 93; 147; 1902, 15; 110) がよく使われた。さらに、これらのオーストリアと隣接している山岳地帯をまとめてシリーズ化した絵葉書「栄光なるアルプス *LE ALPI GLORIOSE*」も、第一次大戦中にベッルーノの P. Breveglieri 社によって発行されていた。このシリーズは凝ったデザインの2色刷りで、中央に配したダークグリーンの中景の山岳風景写真の左上斜めに緑色と赤色の太いストライプを引いてイタリアの国旗を表現し、地名のキャプションとシリーズ名の文字は赤で印刷され、裏面に文人の詩を掲載しているが、やはり頻繁に出てくるのはカルドゥッチ作品からの引用であった。

同テーマでもっと分かり易くかつ過激な絵葉書が、ヴィチエンツァ県スキオ Schio の出版社 G. Z. から発行された。「1915年5月24日から回収すべきイタリアの山頂 *VETTE D'ITALIA redente a libertà dal XXIV - V - MCMXV*」と命名されたシリーズである。つまり第一次大戦の開戦日を明記した、イタリア領であるべきオーストリアに接している山岳の風景写真を載せた絵葉書シリーズであるが、これもイタリア3色国旗の色をあしらった赤と緑の太い線が、風景写真の中央部左右の額縁部分に引かれていて、下方の余白に愛国詩人たちの引用が刻まれた。カルドゥッチのものでは詩「カドーレ」(Carducci, 1892, 6; 10-11)、「ピエモンテ」(Carducci, 1902, 19)、「国民投票 *Il plebiscito*」

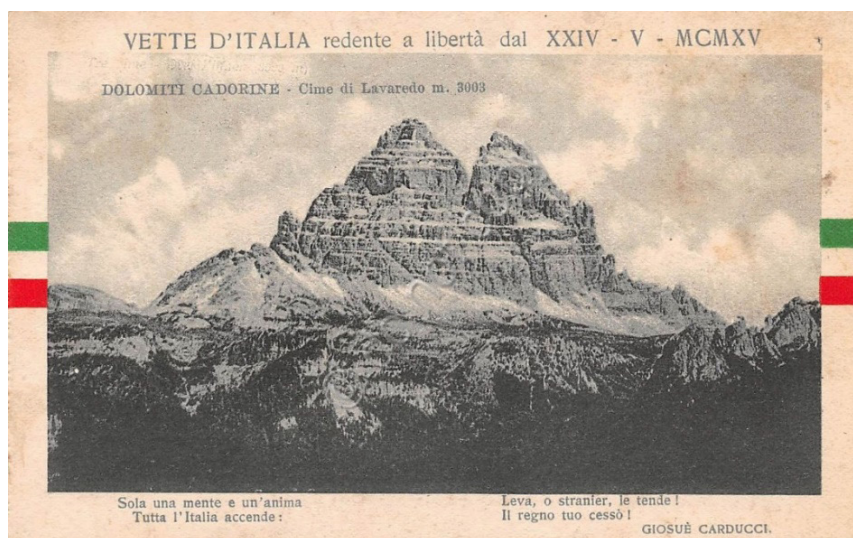


Fig. 11 : 「1915年5月24日から回収すべきイタリアの山頂」という絵葉書シリーズより、カドーレのドロミティ山塊の風景とカルドゥッチの詩「国民投票」からの引用：「*Sola una mente e un'anima / Tutta l'Italia accende: / Leva, o stranier, le tende! / Il regno tuo cessò!* 心と魂だけ/イタリア全土が燃え上がる/よそ者よ撤退せよ/あなたの王国は終わった!」(Carducci, 1880, 251) が載った例 (1915年、G. Z. Schio 発行)

(Carducci, 1880, 251)、「シチリアと革命 *Sicilia e la rivoluzione*」(Carducci, 1882, 9) などから、愛国心を表現した箇所が引用された (Fig. 11)。

## 5. ダヌンツィオの言葉が引用される風景絵葉書

二つの大戦期を象徴する愛国詩人ダヌンツィオ Gabriele D'Annunzio (1863-1938) を題材にした絵葉書の種類は極めて多い。本人の顔や全身を写した銀塩写真のプロマイド絵葉書、イラスト版画のカリカチュア絵葉書 (内田, 2015, 206-219)、同郷の画家カシェッラ Basilio Cascella (1860-1950) がアブルッツォを舞台にしたダヌンツィオの小説『死の勝利 *Trionfo della morte*』(1894年) や『炎 *Fuoco*』(1900年) をイラスト化した美しい多色版画絵葉書シリーズ、ダヌンツィオがフランスの海浜町アルカション Arcachon に滞在中に愛犬と松林にいる様子を撮影したフランス製の写真絵葉書など他にも色々あるが、本節では、風景写真にダヌンツィオ作品の引用が載っている絵葉書に限定して論じてゆく。

ダヌンツィオ作品の舞台となったアブルッツォ州は、風景観光絵葉書の題材として1920年以降に増加している。代表作『死の勝利』には、主人公の故郷ガルディアグレレ Guardiagrele ほか、カザルボルディーノ Casalbordino、トッコ・ダ・カザウリア Tocco da Casauria、オルトーナ Ortona、月明りに照らされた漁師小屋トラボッコ trabocco がでてくるサン・ヴィート・キエティーノ San Vito Chietino (Fig. 12) といったアブルッツォ各地が登場し、どれも絵葉書の題材になった<sup>(49)</sup>。ダヌンツィオが小説『岩場の乙女たち *Le Vergini delle Rocce*』(1895年) を執筆した町ポーポリ Popoli や、『ペスカラ物語集 *Le Novelle di Pescara*』(1902年) にでてくる町ミリアーニコ Miglianico も絵葉書化したし、マイエツラ山麓と深く結び付いた戯曲『*La figlia di Iorio* イオリオの娘』(1904年) の舞台となったカヴァッローネ洞窟 Grotta del Cavallone (当時は「イオリオの娘の洞窟 Grotta della “Figlia di Jorio”」と呼ばれていた) にいたっては、様々な角度から撮影された絵葉書シリーズまで発行された<sup>(50)</sup>。なおアンヴェルサ・デッリ・アブルッツィ Anversa degli Abruzzi という村については、『柀の下の松明 *La Fiaccola sotto il Moggio*』(1905年) の舞台であることをアピールした観光絵葉書も登場した<sup>(51)</sup>。

20世紀初頭よりアブルッツォ州が観光地として再発見されていったのは、ダヌンツィオの功績と、同時代に多くの民俗学・文化人類学・方言学の方面でアブルッツォ研究が急速に進められてきたことにもよるだろう<sup>(52)</sup>。また、作曲家のトスティ Francesco Paolo Tosti (1846-1916) も、ダヌンツィオの詩によるアブルッツォの情景を謳った歌曲の数々を世に送り出していた時代である (栗原, 2018, 3-18)。

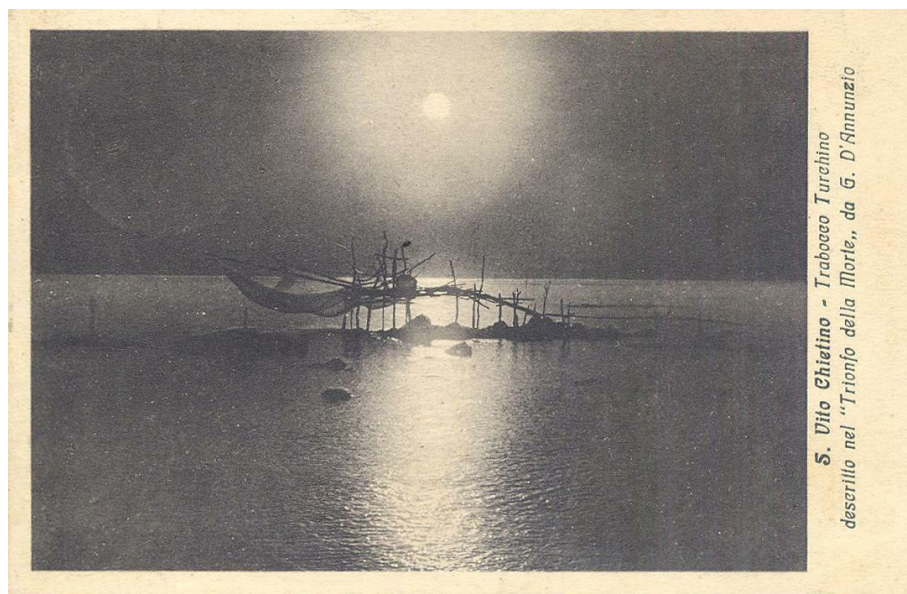


Fig. 12: ダヌンツィオの小説『死の勝利』にでてくる月明りに照らされたサン・ヴィート・キエティーノにある漁師小屋トラボッコを題材にした絵葉書 (1920年代)



アブルッツォ独特の美しい民俗衣装に身を包んだ女性たちが登場する観光絵葉書もこの頃から増え始め、その舞台となった土地はスルモーナ Sulmona やスカンノ Scanno など、ダヌンツィオが好んで訪れた場所でもあった。しかし以上に挙げたようなアブルッツォの風景を描いた観光絵葉書に、ダヌンツィオ作品の引用が組み合わせられたものを見つけるのはじつは難しい。

生誕地ペスカーラ Pescara の松林は「ダヌンツィオの松林 Pineta dannunziana」と呼ばれ、この松林の絵葉書が1920～50年代に発行されていた。しかしこれにすらダヌンツィオの詩の引用が添えられることはほとんどなく<sup>(53)</sup>、引用が確認できたのは1920年代にペスカーラの個人 (Ed. Francesco Nardillo, riven. private) が作成した1点で、ダヌンツィオの言葉として「Il ciuffo sconvolto sull'Adriatico verde アドリア海を緑に覆いつくす房」という一節が掲載された (Fig. 13)<sup>(54)</sup>。また、ダヌンツィオが訪れた場所とダヌンツィオ自身が書いた詩を組み合わせた絵葉書は、サルデーニャ島のヴィッラチードロ Villacidro にある滝を謳った「サ・スペンドウラ La Spendula」(1882) (D'Annunzio, 1919, 25) を掲載した1950年代の絵葉書ぐらいしか確認できなかった。

その一方、絵葉書に使用された風景写真と詩の舞台が一致しなくても、詩の表現と風景の雰囲気合っているためにダヌンツィオ作品からの引用を使った例は多く、次のようなものがある。トスカーナの海浜町ヴィアレージョ Viareggio の海にヨットが浮かんだ風景絵葉書 (1920年代) には、ダヌンツィオの詩「E.Z.に捧ぐ Ad E.Z.」から、「... e sogni una goletta entrante in porto a' venti mattutini fra li opàli de l'acqua violetta ...そして君は夢見る。紫色の水の真珠をかきわけて、帆掛け舟が毎朝のように港に入るのを」(D'Annunzio, 1882, 7) という箇所引用が使われ、リグーリアにある岩山のふもと村クロチェフィエスキ Crocefieschi の風景絵葉書には、シチリア島の火山の名を冠した詩「エトナ山にて A l'Etna」から、「Oh! Quante volte su' tuoi massi assiso / mirai tramonti ed orti e vidi 'l sole / molcere i colli 'ntomo d'una ebrezza di rosea luce! ああ! エトナの岩山に何回登っただろう。夕日と緑地に見とれ、太陽を見た。恍惚とした薔薇色の光が丘を取り巻いて愛撫するんだ!」(D'Annunzio, 1907, 72) という、エトナ山の「岩山」を取り巻く自然を賛美した箇所が載せられた。つまり、引用された詩の舞台となった地名と、絵葉書の題材の土地が、岩山という共通項を除き全く一致していない。つまりそれでも全く構わないということは、ダヌンツィオからの引用であれば格式がでるという思惑があったからなのではないだろうか。

ダヌンツィオの作品からの引用は、1926年設立の航空会社 ALI (Avio Linee Italiane) の協力の元、空軍省の宣伝印刷局 (Ufficio Stampa e Propaganda del Ministero dell'Aeronautica) から発行された空撮絵葉書シリーズにも登場している。このシリーズはファシスト政権下の国家権力を誇示したプロパガンダ絵葉書で、表面にイタリア各地の観光名所の航空写真、裏面に飛行機の偉大さが伝わる短文、例えばムッソリーニや高名な操縦士であったイタロ・バルボ Italo Balbo (1896-1940) らの言葉を掲載していたが、ダヌンツィオの作品からは、飛行機をテーマにした小説『多分よし、多分だめ Forse che sì, forse che no』(1910年)からの引用が添えられた。例えばこの空撮シリーズの



Fig. 13: ダヌンツィオの故郷ペスカーラの松林にダヌンツィオの言葉が添えられた絵葉書 (1920年代)



Fig. 14: ファシスト政権下の空軍省の宣伝印刷局がつくった空撮シリーズ絵葉書から、ナポリのポジリポを空からみた風景、裏面にはダヌンツィオの航空小説『多分よし、多分だめ』の引用がある例 (1920年代)

なかで、上空からみたエトナ山 Etna の写真絵葉書には小説『多分よし、多分だめ』から、「L'anima immensa aveva valicato il secolo, accelerato il tempo, profondato la vista nel futuro, inaugurato la novissima età. Il cielo era rivenuto (sic: ダヌンツィオは divenuto と記述) il suo terzo regno 壮大な魂が世紀を超え、時間を加速し、未来への展望を広げ、新しい時代が到来した。空は第三王国になったのだ」(D'Annunzio, 1910, 101) という箇所が使用された。同シリーズで、空から見たトリノのスベルガ聖堂 Basilica di Superga の絵葉書には、「Il cielo incurvato nella (ダヌンツィオは nella ではなく su la と記述) pianura fa un immenso stadio azzurro, chiuso dalle nubi, dai monti, dai boschi 平原上空は、湾曲しながら、雲や山々や森で縁取った青く巨大なスタジアムをつくりだす」(D'Annunzio, 1910, 68) という箇所が使われ、ナポリのポジリポ地区 Posillipo の空撮絵葉書には、「riapparivano per baleni di gloria, su piani, su colli, su laghi d'Italia bella, altre ali d'uomo 人類のもう一つの翼が、栄光なる閃光のために、美しいイタリアの平原、丘、湖の上に再び現れたのだ」(D'Annunzio, 1910, 66) という部分が掲載されたのだ (Fig. 14)。ダヌンツィオは1918年、自らの発案で飛行機に乗り込みウィーン上空から対オーストリアのプロパガンダ用ビラを撒いている。そんな極右思想を持ったダヌンツィオが書く飛行機小説からの引用を付した空軍省の空撮シリーズ絵葉書は、政治的にも愛国的ナショナリズムを掻き立てる目的があったのは明らかだ。

1928年、トリノに建立された松明を持つ勝利の女神ヴィットリアの巨像 Faro della Vittoria の台座には、ダヌンツィオの愛国的な碑文が刻まれた。ファシスト期に発行されたこの女神ヴィットリアの巨像を題材にした絵葉書では、表面にその全貌写真、裏面に碑文の全文が印刷されている。この場合は、すでに被写体そのものがダヌンツィオの息吹きがかかったナショナリズムの権化であるが、第二次大戦後もダヌンツィオと愛国が結びついたスポットの観光絵葉書が発行されている。例えばアクイレイア Aquileia の教会にある、第一次大戦でオーストリア軍と戦った戦没者墓地の壁にもダヌンツィオの碑文が掛けられているのだが、この石碑だけを撮影した絵葉書や、墓地全景を表面に碑文の全文を裏面に印刷した絵葉書が1940年代に販売されていた。詩人の碑文を題材にした観光絵葉書では、フィエーゾレ Fiesole の聖フランチェスコ修道院 Convento di San Francesco に沿った道の塀に掛けられたカルドゥッチのソネット「フィエーゾレ Fiesole」の全文 (Carducci, 1889, 31) が刻まれた石碑を題材にした観光絵葉書も1950年代に出回っていた (Fig. 15)<sup>(55)</sup>。

#### 4. おわりに

以上、ダンテ、カルドゥッチ、ダヌンツィオといった大詩人を中心に、彼らの詩の引用が付いた20世紀前半に発行





Fig. 15: カルドウッチのソネット「フィエーゾレ」の全文の石碑があるフィエーゾレの聖フランチェスコ修道院の塙(左手)と聖アレクサンドロ聖堂(右手)のある1950年代の絵葉書(版元はフィレンツェのInnocenti)

された風景絵葉書の事例を辿っていったが、他にも数多くの有名無名の詩人たちもこの現象に彩りを与えていた。しかし知名度の高い作家であるマンゾーニとピランデッロの作品からの引用は、この種の風景絵葉書にほとんど出てこない。その理由は、これらの絵葉書はイタリアの風景賛美と愛国心に基づいて制作されていたため、彼らの作品から適した詩句がなかったためだろう。詩人の引用を付した美しい風景絵葉書によって祖国愛を喚起させることは、英国のタック社が発行する詩付き風景絵葉書が興隆していた時期が、大英帝国が植民地を拡大しエドワード7世が1902年に戴冠、1911年に次期国王ジョージ5世の戴冠し、古代ローマ時代の繁栄「パクス・ローマーナ」にあやかった「パクス・ブリタニカ」という言い回しのもと、覇権国家としてナショナリズムが高揚してきた年代と重なっていたことと偶然ではない。一方イタリアの場合、国際的な国民国家としてのプロパガンダを増大させてきたのは、第一次大戦からファシズム期にかけてで、旧オーストリア領を回復し、アフリカに植民地を築き、クロアチアやギリシャの島々を占領し領地を拡大していった。まさにこの時期になってイタリアでは引用詩付きの風景絵葉書が流行しているのである。これは絵葉書という印刷芸術メディアを利用して、20世紀イタリアにささやかに花開いたナショナル・ロマンティシズムの一端といえる現象ではないだろうか<sup>(56)</sup>。

### 【謝辞】

本研究は、2019年度跡見学園後援会助成金による外国出張旅費の助成を受けて実施された研究発表の一部である。ここに記して心より謝意を表します。

### 注

- (1) 20世紀初頭の銀塩写真絵葉書の題材は、観光地の風景も沢山あるが、人物を主体にしたプロマイドのようなもののほうが比較的多い傾向にあるようだ。
- (2) 先行研究がないテーマであるため、本稿は当時の詩付き絵葉書そのもの(筆者のコレクション)約1200枚を閲覧して判断・推論した。よって参考文献は主に、詩の引用元を同定するために使用した当時の原文テキストになっている。
- (3) 日本の絵葉書の場合は基本的にアノニマスな風景ではなく、石川啄木や宮沢賢治にゆかりのある東北の土地の写真に、関連する詩の引用を添えた観光絵葉書セットが、戦前から昭和30年代ぐらいまで流通していた。
- (4) 2017年7月12日、ポルトガルのリスボン・ノーヴァ大学(Universidade Nova de Lisboa)で行われた学術会議「III International Conference CHAM “Oceans and Shores: Heritage, People and Environment”」での執筆者による単独発表: *How to see the «Waves in Undulation Vast» between the 18th and the early 20th Century* (18世紀から20世紀初頭までの「うねりの波」の鑑賞法)より。
- (5) バイロンとディケンズについては、代表的な文学作品の名場面のイラストと関連個所の引用を添えた6枚セット絵葉書シリーズもタック社から出版されていた。ディケンズは『クリスマス・キャロル』の作者であるゆえに、そこからの引用を付したクリスマス・グリーティ

ング用絵葉書シリーズも数多く同社から発行されている。

- (6) シェイクスピア作品からの引用は、牧歌的な田園風景の絵葉書だけでなく、英王室をテーマにしたシリーズ絵葉書でも頻出した。
- (7) なおタック社の美女をテーマにした絵葉書では、19世紀の東洋学者エドウィン・アーノルドEdwin Arnold (1832-1904)からの引用を添えた日本の芸者(着物を着た英国女性のモデル写真)シリーズまで発行されていた。
- (8) イタリアでの数少ない事例としては、穏やかな海の写真にウエルギリウスの『アエネーイス』からの波の描写に関わる引用«*...far nel mare un sì gran moto osate? / lo vi farò... Ma di mestiero è prima / Abbonazzar quest'onde*» (Virgilio 1827: 31)を付した絵葉書(印刷所不明、1910-20年代)や、海の岩に波しぶきがかかっている写真にダンテの『神曲』の煉獄篇(第1歌117)からの引用を添えた絵葉書を筆者は確認している(本稿のダンテに関する節も参照)。
- (9) 本稿では、比較的知名度の高い人名の姓名の欧文表記と生没年は随時省略するか、トピックとなるときにのみに記述している。
- (10) この絵葉書に引用された箇所は: «*Me ne la calma immensa / Torna ai ricordi il core, / E ad un sopito amore / Pensa*» (Negri, 1911, 32)。
- (11) この絵葉書に引用された箇所は: «*Casette Bianche sfavillanti al sole / Con le finestre aperte e ai piedi il verde, / Come lento su voi l'occhio si perde, / Casette bianche sfavillanti al sole!*» (Negri, 1896, 231)であるが、同箇所の引用は、別の絵葉書シリーズ「Cadore Pittoresco」(本稿後述のカルドウッチの節を参照)でも使われた。
- (12) この絵葉書に引用された箇所は: «*Tutto intorno è pace / Chiuso in oblio profondo / Indifferente il mondo / Tace. / Me ne la calma immensa / Torna ai ricordi il core, / E ad un sopito amore / Pensa*» (Negri, 1911, 32)。
- (13) この絵葉書に引用された箇所は: «*...al verdeggiar lontanos / Dei pascoli in pendio / Ove l'anima a sorsate ampie respira / Con l'acre essenza che da l'erbe spira. / L'ebbrezza de l'oblio*» (Negri, 1896, 219)で、同箇所の引用は、同時代の別の絵葉書シリーズ「Carnia Pittoresco」(本稿後述のカルドウッチの節を参照)でも使われている。
- (14) この絵葉書に引用された箇所は: «*...Chinati* (ネグリはChinatiではなくChinaと記載) / *sul mare, ascolta il pianto inconsolabile / dell'acque che s'inseguono s'infrangono / e muojono e rinascono e non sanno perché*» (Negri, 1910, 114-115)。
- (15) この絵葉書に引用された箇所は「ソネット Sonetto」から: «*O cameretta, che già in te chiudesti (...)* *Qui basta il nome di quel divo indegno*» (Alfieri, 1810, 162)。
- (16) この絵葉書に引用された箇所は: «*Noi proseguimmo il nostro breve pellegrinaggio (...) per cui Laura ebbe in terra onor celesti*» (Foscolo, 1813, 18)。
- (17) カルドウッチの詩「とある別荘にて *In una villa*」からの引用: «*O tra i placidi olivi, tra i cedri e le palme sedente / bella Arenzano al riso de la ligure spiaggia; / operosa vecchiezza, t'illustra, serena t'adorna / signoril grazia e il dolce di giovinezza lume; / facil corre in te l'ora tra liete aspettative e ricordi / calmi, si come l'aura tra la collina e il mare*» (Carducci, 1902, 13)がフィゴーリ荘の写真とともに載った絵葉書は1950年代にも発行されていた。
- (18) パスコリの生家は1924年に国家記念物(monumento nazionale)として文化財登録された。Cfr. *Gazzetta Ufficiale del Regno d'Italia*, Anno LXV N. 280, Roma, 1 dicembre 1924, p. 4228。
- (19) この絵葉書に引用された箇所は: «*M'era la casa avanti tacita al vespro puro tutta fiorita al muro di rose rampicanti*» (Pascoli, 1905, 192)。
- (20) この家は1926年に国家記念物に登録された。Cfr. *Gazzetta Ufficiale del Regno d'Italia*, Anno LXVII, N. 177, Roma, 2 agosto 1926, p. 5。
- (21) この絵葉書に引用された箇所は: «*Don...Don... E mi dicono, Dormi ! / Mi cantano, Dormi! sussurrano, / Dormi! bisbigliano, Dormi! / là, voci di tenebra azzurra ... / Mi sembrano canti di culla, / che fanno ch'io torni com'era... / sentivo mia madre... poi nulla... / sul far della sera*» (Pascoli, 1905, 128)。
- (22) この絵葉書に引用された箇所は: «*Sonata già l'Avemaria della Chiesa di Caprona, si sente correre via via la squilletta che risona...*» (Pascoli, 1905, 67)。
- (23) この絵葉書に引用された箇所は: «*Tu sulla bruna valle alta sfavilli, Barga coi cento lumi tuoi...*» (Pascoli, 1907b, 60)。
- (24) この絵葉書に引用された箇所は: «*... Strada erbata, vecchie case, soglie consunte ...Man mano che si va innanzi, la via è più raccolta e silenziosa. In vero ella è come la Via sacra che conduce al sacro Clivo, alla piccola Acropoli, al Castello, di Barga; al Castello col Duomo, i Lavelli e l'Arringo...*» (Pascoli, 1907a, 131)。
- (25) この絵葉書に引用された箇所は: «*... Oh! mi ricordo che quell'albergo, nato nel quattordici trapiantato qui nel trentasei, pochi anni dopo che Mazzini ebbe fondata la GIOVINE ITALIA, è di questa giovine Italia, della terza, della nostra Italia, il simbolo verde e perenne!*» (Pascoli, 1907a, 312)。
- (26) この絵葉書に引用された箇所は: «*...Ma il canto andata, delle tombe, al cielo. / Rosso era il cielo, che s'empia di stelle. / Lucean le stelle ai morti. In mezzo, eretto, / Si riposava sulla enorme spada / Alberto da Giussano*» (Pscolli, 1924, xx)。
- (27) 一方、パスコリの墓を撮影した写真絵葉書(1930年代)には「詩 *La Poesia*」という作品から、«*Io sono la lampada ch'arde soave! Nell'ore più sole e più tarde, nell'ombra più mesta, più grave, più buona o fratello*»という箇所が引用された(Pascoli, 1905, 8)。
- (28) この絵葉書に引用された箇所は: «*A casa mia giunto sul vespro infine, / io vedo un sogno ch'è pur cosa vera. / I quattro peri che piantai nell'orto / a circondar la conca d'arenaria, / vedo fioriti! E il cielo è bigio e smorto, / la nebbia fuma, fredda punge l'aria: / la neve è su la Pania solitaria... / - Allora, a marzo, o che lassù non c'era?» (Pascoli, 1939, 600-601)。*



- (29) またダンテの影響を受けたダヌンツィオの戯曲『フランチェスカ・ダ・リミニ』の名場面を実写写真で描いた絵葉書シリーズも20世紀初頭に、テルニのArterocca社から発行されていた。
- (30) ダンテの『神曲』の邦訳は平川祐弘訳(河出書房新社、1992年)を参照したが、他の詩の引用と同様に、すべて筆者による新訳である。
- (31) この絵葉書には、使用写真が1901年のローディで開催された芸術展で入賞している但し書き: Proprietà riservata all'autore Luigi Poggiolini, Rocca S. Casciano (Firenze) Premiato all'Esposizione di Lodi 1901が記載。
- (32) 引用された箇所は: «...*Mi piace di pensare che Dante ospite dei Malaspina, avesse la visione della Città di Dite guardando le Alpi Apuane affocate dal sole occiduo, vermiglie, veramente, come se di fuoco uscite (sic: ダヌンツィオはfoco esciteと記述) fossero. Chi le ha vedute una volta, dal mare, ardere nel deserto dell'etere, non può non consentire alla mia immaginazione*» (D'Annunzio, 1995, 31)。
- (33) この絵葉書に引用された箇所は: «*Nel roseo lume placidi torrenti (sic: カルドウッチはsorgentiと記述) / I monti si rincorrono tra loro, / Sin che sfumano in dolci ondeggiamenti / Entro i vapori di viola e d'oro*» (Carducci, 1889, 217)。
- (34) この絵葉書に引用された箇所は: «*Ecco la chiesa. E surse ella che ignoti / servi morian tra la romana plebe / quei che far poscia i Polentani e Dante / fecegli eterni. (...) Salve, affacciata al tuo balcon di poggi / tra Bertinoro alto ridente e il dolce / pian cui sovrasta lino al mar Cesena / donna di prodi*» (Carducci, 1902, 104-110)。
- (35) カルドウッチが植樹している姿を写した時事的な絵葉書も1910年ごろまで流通していた。
- (36) 参照: (Carducci, 1902, 97-99)。
- (37) マルゲリータ王女に捧げた詩「リュートとリラ *Il liuto e la lira*」からの引用: «*Avanti Savoia! Non anche tutta desti la bandiera al vento*» (Carducci, 1902, 97-99); (Carducci, 1893, 96) や、詩「ブレーシャのウェスパシアヌス神殿の遺跡から勝利へ *Alla Vittoria tra le rovine del tempio di Vespasiano in Brescia*」からの引用: «*Vorrei vederti su l'Alpi splendida / Fra le tempeste, bandir nei secoli / "O popoli, l'Italia qui giunse / Vendicando il suo nome ed il diritto"*» (Carducci, 1877, 74) などが、トレントのダンテ像の絵葉書に用いられていた。
- (38) この詩は、ダンテ専門誌「*Giornale Dantesco*」(vol. 11, 1903)に掲載されたのち、詩集『エレクトラ』に収録された。この詩から絵葉書用に引用された箇所は: «*Trento, l'indomata figlia, cui la corda non spegne la voce interata, che chiama, che chiama la madre nell'orror notturno*» (D'Annunzio, 1918, 20) や、«*Passano i Bonturi e il seguace lor gregge immondo. Durano gli eroi esterni nei fasti d'Italia*» (D'Annunzio, 1918, 23) や、«*Trieste come te perduto, come te perduto. L'Istria, ala mertè del nemico le porte d'Italia, ottenuta Venezia con man di mendico, laggiù sola su l'Adria la macchia di Lissa, l'infantia tutta l'onda; e disse: "Obbedisco"*» (D'Annunzio, 1918, 24) など、絵葉書によってまちまちである。
- (39) この絵葉書は1920年代にスポレートのEdit. F.II. Giuzi社から発行されたもので、詩の引用は、スポレートの全景写真のある表面ではなく、住所を記載する裏面の余白に印刷されている。
- (40) イヴレーア全景の写真絵葉書には、«*Ivrea la bella che le rosse torri / Sognando specchia (sic: カルドウッチはspecchia sognandoと記述) a la cerulea Dora / Nel largo seno, fosca intorno è l'ombra / Di re Arduino*» (Carducci, 1902, 16) が掲載されるが、出だしは同じだが引用の長短は絵葉書によって異なる。
- (41) カルドウッチの詩「クールマユール *Courmayeur*」から、«*Conca in vivo smeraldo tra foschi passaggi dischiusa, o pia Courmayeur, ti saluto*» (Carducci, 1893, 92) という箇所が引用された。
- (42) この絵葉書に引用箇所は: «*Dimmi: Perché sotto il fiammante vespero misteriosi gemiti manda il mare là giù?*» (Carducci, 1877, 46)。
- (43) この絵葉書に引用箇所は: «*l'acque a margini / di gemiti e sorrisi / un suon morbido frangono*» (Carducci, 1877, 32)。
- (44) この絵葉書に引用箇所は: «*E l'aure e l'acque e i fior con voce unile / Mormoran di sommessi amor richiami / E più dolce fra' rami / Corre la melodia di primavera*» (Enotrio, 1868, 185)。
- (45) リグーリアの村ピエーヴェ・ディ・テーコの絵葉書には、カルドウッチの詩「チェリロ *Cèrilo*」からの引用: «*Qui brilla il maggio effuso nell'aere odorato di rose*» (Carducci, 1893, 105) が載せられたが、これも詩の舞台と場所と一致しているのではなく、季節の自然描写に合わせただけである。
- (46) この絵葉書に引用箇所は: «*Ecco: la verde Sirmio nel lucido Lago sorride fiore delle penisole*» (Carducci, 1893, 61)。
- (47) 詩の引用付きの、同名のシリーズ絵葉書は、競合他社であるEd. U. Cavinato Dita Garioni PiacenzaやEd. R. S. P. (所在地不明)からも発行されていた。
- (48) カルドウッチの愛国詩から、絵葉書シリーズ「*Il bel Cadore*」に使用されたものは、先出の詩「ブレーシャのウェスパシアヌスの神殿での勝利に寄せて」(Carducci, 1877, 74)、「サヴォイア家の十字 *Alla Croce di Savoia*」(Carducci, 1880, 243)、「1848年のヴァルテッリーナでのとある戦い *A una battaglia di Valtellina del 1848*」(Carducci, 1893, 83)、「クールマユール *Courmayeur*」(Carducci, 1893, 92)、「ピエモンテ *Piemonte*」(Carducci, 1902: 15)、「ナポレオン戦争の戦地に因んだ「ピオッカ・ディ・サン・ジャコモ *Bicocca di San Giacomo*」(Carducci, 1902, 39)、「スプルガ山悲歌 *Elegia del Monte Spluga*」(Carducci, 1902, 91)だった。もう一つの絵葉書シリーズ「*Cadore Pittoresco*」に使用されたカルドウッチからの引用は、«*Qui dove arride i fortunati clivi. Perenne Aprile a l'aure molli odora. E ondeggian messi e placido d'olivi. Bosco s'infiora*» (Carducci, 1868, 70)、「«... *Il capo grigio nell'aere sciolgono, come vecchi giganti che l'elmo chiomato scotendo. A la battaglia guardano*» (Carducci, 1892, 5)、「«*Nel gran cerchio de l'Alpi, su 'l granito. Squallido e scialbo, su ghiacciai candenti, Regna sereno intenso ed infinito. Nel suo grande silenzio il mezzodi*» (Carducci, 1902, 85)

だった。ときにはレオバルデイの詩からの引用「*Primavera d'intorno ... Odi i greggi a belar, muggire armenti*」(Leopardi, 1860, 40)が、カルドゥッチのものとして誤記されて使用していたものもあるが、それだけカルドゥッチからの引用が多かったために生じたミスと思われる。

- (49) 今では漁業器具であるトラボッコはベスカラとその周辺の観光資源の象徴のひとつとなっている。
- (50) 洞窟近くのアブルッツォの村ラーマ・デイ・ペリーニ Lama dei Peligni のピネリ兄弟社 (Ediz. F.lli. Pinelli) より1910-20年ごろに製品化されていた。
- (51) 1940年代に発行されたその絵葉書には、「『柁の下の松明』のまちーサンゲロ城の遺構 Il paese de “La Fiaccola sotto il Moggio” Resti del Castello del Sangro」というキャプションが書かれていた。
- (52) 例えばダヌンツィオの友人の文化人類学者デ・ニーノ Antonio De Nino (1833-1907) の著作『アブルッツォの諺 *Proverbi abruzzesi*』(1877年)、『アブルッツォの風習 *Usi e costumi abruzzesi*』(全6巻、1879-97年)、フィナモーレ Gennaro Finamore (1836-1923) による『アブルッツォ語辞典 *Vocabolario dell'uso abruzzese*』(1880年)や『アブルッツォの伝統 *Tradizioni popolari abruzzesi*』(全2巻、1882-86年)、美術史家ビンディ Vincenzo Bindi (1852-1928) による『アブルッツォの芸術家たち *Artisti Abruzzesi*』(1883年)と『アブルッツォの芸術的・歴史的建造物 *Monumenti storici ed artistici degli Abruzzi*』(全2巻、1889年)がある。
- (53) 筆者が確認できたものでは、1940～50年代にテルニの印刷所 Fototopia Beretta に依頼してベスカラの個人 (Ed. Francesco Sferrella) が50部刷ったもの、ベスカラの Ediz. Ris. Ditta Domenico Costantini e Fratelli によるもの、ミラノの印刷所 Stab. Dalle Nogare & Armetti にベスカラの個人 (Ediz. Nicola Celsi) が依頼したものがある。
- (54) この一節はダヌンツィオの1912年12月24日の Antonino 宛ての書簡 (Lucini, 1914, 324) に登場する。
- (55) 石碑は1911年にフィエーゾレの民間大学 Università popolare によって設置され、絵葉書は石碑のみを撮影して詩の全文が判読できるものと、石碑のある通りを写した写真が表面で裏面に詩の全文が掲載されているものがあり、フィレンツェの出版社 Innocenti Editore が発行していた。なおこのカルドゥッチのフィエーゾレの石碑の近くには、ダヌンツィオの「フィエーゾレの夕暮れ」を刻んだ石碑もあるが(國司, 2015, 203)、これを題材にした観光絵葉書は確認できなかった。
- (56) 英国では、20世紀前半の文化にみる愛国性から「モダン・ロマンティシズム」の興隆を論じた研究がすでにある。Cfr. Harris, A. (2010). *Romantic Moderns: English Writers, Artists and the Imagination from Virginia Woolf to John Piper*, Thames and Hudson.

## 参考文献

- Aleardi, A. (1864). *Canti*, Firenze, G. Barbèra.
- Alfieri, V. (1810). *Le opere*, volume XI, Padova, Nicolò Zanon Bettoni.
- Carducci, G. (1877). *Odi barbare*, Bologna, Zanichelli.
- Carducci, G. (1880). *Juvenilia*, Bologna, Zanichelli.
- Carducci, G. (1882). *G. Garibaldi. Versi e prose*, Bologna, Zanichelli.
- Carducci, G. (1889). *Rime nuove*, Bologna, Zanichelli.
- Carducci, G. (1892). *Cadore. Ode*, Bologna, Zanichelli.
- Carducci, G. (1893). *Delle Odi Barbare*, Libri II, Bologna, Zanichelli.
- Carducci, G. (1894). *Opere. Giambi ed epodi e rime nuove*, Bologna, Zanichelli.
- Carducci, G. (1902). *Rime e ritmi*, Bologna, Zanichelli.
- D'Annunzio, G. (1882). *Canto Novo*, Roma, A. Sommaruga e C.
- D'Annunzio, G. (1907). *Primo vere liriche*, Napoli, Salvatore Romano editore.
- D'Annunzio, G. (1910). *Forse che sì, forse che no*, Milano, Fratelli Treves.
- D'Annunzio, G. (1918). *Laudi del Cielo del mare della terra e degli eroi. Libro secondo Elettra*, Milano, Fratelli Treves.
- D'Annunzio, G. (1919). *Gabriele D'Annunzio in tre lettere di X. Y. Z., uno che lo conosce*, Milano, Modernissima.
- D'Annunzio, G. (1923). *Per l'Italia degli Italiani*, Milano, Bottega di Poesia.
- D'Annunzio, G. (1995). *Prose scelte. Antologia d'Autore (1906)*, a cura di P. Gibellini, Firenze, Giunti.
- Enotrio, R. (Carducci, G.) (1868). *Levia gravia*, Pistoia, Niccolai e Quarteroni.
- Foscolo, U. (1813). *Ultime lettere di Jacopo Ortis aggiuntovi i Sepolcri e poesie*, Milano, Stamperia del Genio.
- Kant, I. (1828). *Kritik der Urteilskraft und Beobachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen*, Leipzig, Leopold Voss [cit. in カント全集2 (2000), 東京, 岩波書店, 319-384].
- Kawamura, E. (2016). *Incanto del mare in tempesta e di rocce curiose: reminiscenze del sublime nel paesaggio naturalistico europeo nelle cartoline di inizio Novecento, in Delli Aspetti de Paesi. Vecchi e nuovi Media per l'Immagine del Paesaggio*, a cura di A. Berrino e A. Buccaro, vol.1, Napoli, CIRICE, 461-470.
- Kawamura, E. (2021). *La diffusione delle cartoline di paesaggi e di città accompagnate dai versi di alcuni poeti italiani, negli anni fra le due guerre*, Atti del IX Congresso dell'Associazione italiana di storia urbana (Bologna, 11-14 settembre 2019) (編集中心).
- Lucini, G.P. (1914). *Antidannunziana. D'Annunzio al vaglio della critica*, Milano, Studio Edtriale Lombardo.
- Mameli, G. (1859). *Scritti*, Genova, Dagnino.
- Negri, A. (1896). *Tempeste*, Milano, Fratelli Treves.
- Negri, A. (1910). *Dal profondo*, Milano, Fratelli Treves.



- Negri, A. (1911). *Fatalità*, Milano, Fratelli Treves.
- Pascoli, G. (1905). *Canti di Castelvecchio*, Bologna, Zanichelli.
- Pascoli, G. (1906). *Odi e inni*, Bologna, Zanichelli.
- Pascoli, G. (1907a). *Pensieri e discorsi*, Bologna, Zanichelli.
- Pascoli, G. (1907b). *Primi poemetti*, Bologna, Zanichelli.
- Pascoli, G. (1924). *Poemi italici e canzoni di Re Enzo*, 3. ed., Bologna, Zanichelli.
- Pascoli, G. (1939). *Poesie di Giovanni Pascoli, con un avvertimento di Antono Baldini*, Verona, Mondadori.
- Pascoli, G. (1827). *L'Eneide di Virgilio tradotta da Annibal Caro*, vol. 1, Firenze, Tipografia Coen &Comp.
- 内田健一 (2015) 「ダンヌンツィオのカリカチュア」, 村松真理子 (編)『イタリア地中海研究叢書 1:ダンヌンツィオに夢中だった頃』, 206-219.
- 河村英和 (2015) 「ファシズム期のプロパガンダ絵葉書—その分類と傾向」, 『日伊文化研究』, 第53号「特集 ファシズムと芸術」, 24-36.
- 國司航佑 (2015) 「《詩人の復活》—フィレンツェにおけるダンヌンツィオ」, 村松真理子 (編)『イタリア地中海研究叢書 1:ダンヌンツィオに夢中だった頃』, 201-205.
- 栗原光太郎 (2018) 「G.ダンヌンツィオの詩に対するF.P.トスティによる取り扱いの態度について」, 『東京音楽大学大学院論文集 第4巻』, 3-18.